

---

# 紅に誓う

木立久美子

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

紅に誓う

### 【コード】

N5180C

### 【作者名】

木立久美子

### 【あらすじ】

少し精神不安定なクローム。骸×髑髏要素有り。

## 注意書き

家庭教師ヒットマンREBORN!の、クローム髑髏を中心としたファンフィクションです。

私、木立久美子の主観で書かせていただいていますので、原作のキヤラとは少し違う部分もあるかもしれません。

なお、ネタバレもありますので未読の方は充分ご注意下さい。

時期設定としては、綱吉達が中学3年生くらいを想定しました。

(と言っても、特にこだわってはいません。お読みになってくださる際は、ご自分に都合の良い時期を想像してください)

骸の本体はまだ復讐者の牢獄にいます。

奈々ママンは原作より天然ボケ3割り増しかと思われれます。

ランボと髑髏の初対面は、14巻末のオマケを参考にしています。

イーピンだけはアニメ設定で、日本語もほんのすこし話せます。

ほんのり骸×髑髏。

凧の母親については、あまり良いこと書いてません。

原作ではそれほど詳しく描写されなかったので、私の想像で補っています。

そのほか、捏造設定も諸々。

以上のことに了承くださる方のみ、お読み下さい。

## 夢

「骸様、骸様、骸様」

透き通った世界。揺らぎ続ける曖昧な世界。

静寂の中で、その人の名前を呼びながら、私は草原を駆けていた。

ああ、湖が見える。

淡い光を弾いて、きらきらと輝く水面。

「骸様、骸様」

きつとあそこにいるはず。

そう思い、裸足で地面を蹴って走り続けた。

近づいていくと、湖の傍に、聳え立つほど大きな樹が見える。

「骸様」

木陰に座って、じっと水面を見つめる横顔。

いた。

やっと、見つけた。

「む　く　ろ　さ　ま　」

息を切らしながら、名前を呼ぶ。

届くかどうか分からなかったけれど、一生懸命に手を伸ばした。

そして。

私の声に気づいたその人は、ゆっくり、ゆっくりと振り向いて。

「　　」

何を言ったのか。

目を覚ました私は、夢の内容をぼんやりとしか覚えていなかった。

「あれ？ 髑髏だ」

「…ボス」

こんにちは、と挨拶されたので、こんにちは、と挨拶を返す。下校途中だったのだろうか、ボンゴレファミリー次期後継者であり髑髏のボスでもある沢田綱吉は、見慣れた制服姿で微笑んだ。

「こんなところで会うなんて珍しいな。髑髏も学校帰り？ …ん？ そういえば黒曜組って、ちゃんと学校通ってんの？ っていうか他の2人は？」

「…」

「あつ。ご、ごめん。一度にたくさん訊きすぎた…かな」

慌てたように言った綱吉に、髑髏は無言でふるふると首を横に振った。

「千種と犬は…さっきまで一緒だったけど、どっか行っちゃった。

私は1人で帰るところなの」

「へ、へえー…」

また置いてけぼりにされたんだ。

綱吉は心の中でそう呟いたが、もちろんそれを髑髏が知るはずはない。

暫く沈黙が続いた。

晩夏とはいえ日はまだまだ長い。夕方だが辺りは明るく、暑さも残っていた。

陽射しに照らされた髑髏の頬はやけに白く、ほっそりと見える。

ちゃんと食べているんだろうかと、綱吉はなぜか心配になってしまった。

「そういえば、髑髏。黒曜に住んでるんだよね」

「うん。…どうして訊くの？」

「あ、いや。それなら、なんで並盛にいるのかな、って」

「…それは」

確かに、綱吉が疑問に思うのも道理である。

ここは並盛中の登下校路だ。

隣町の髑髏が帰り道、気まぐれに寄っただけなのだとしても、いささか遠すぎる気がした。

「骸様：が」

答えようとすると、なぜか、脳裏に今朝の夢がよみがえった。

必死に骸を探していた自分。

自分に何かを言おうとしていた骸。

いったい、何のために。いったい、何を伝えようとしていたのだろうか。

黙り込んだ髑髏を心配してか、綱吉が不安げに顔を覗き込む。

「骸が、何？ あいつがどうかしたのか？ …髑髏？」

「…やっぱり、なんでもない」

ゆるゆると首を振って、髑髏は小さく息を吐いた。

どうかしている。

あんな夢、自分の虚妄にすぎない。確かに精神世界で骸と会話をすることはあるけれど、その声も見える景色も、あんなふうに曖昧で、今にも消えてしまいたいそうなほど危うくはなかった。

ただの夢だ。

骸の意思とは関係ない、髑髏の意識が作り出した幻影。

何かを振り切るように顔を上げて、相変わらず心配そうな表情でこちらを見つめるボンゴレ10代目に、髑髏は静かな口調で言った。「ちよつと、考え事してて。ぼんやり歩いてたら…気づいたときには、並盛（こゝ）にいたの」

「…ふーん」

綱吉はまだ少し納得していない様子だったが、とりあえず相づち

を打って頷いた。

なんとか誤魔化したことに安堵した髑髏は、小さく息をつきながら鞆の持ち手部分をぎゅっと握りしめる。

それじゃあ、と相手に背を向けた。

「ばいばい、ボス」

「えっ、ああ、うん。ばいば…」

「待てクローム」

「？」

「うわっ、リボン！？」

綱吉の言葉を遮り、ついでに髑髏の進行方向も遮った家庭教師の姿に、綱吉は驚いたように目を瞬いた。

「ビックリしたあ…。お、お前どこから出て来たんだよ」

「その塀の上だぞ」

「なっ…もしかして、ずっと見てたのか？ いつから？」

「お前がマヌケな顔で『あれ？ 髑髏だ』って言ったあたりからだな」

「ほぼ最初からかよ！！」

テンポよく掛け合っている師弟コンビを、髑髏は少し困った様子で見つめていた。

リボンが呼び止めたのは髑髏だったわけだから、このまま黙って帰ることはできない。

かといって、もともとあまり口の上手くない彼女がこの師弟漫才に割り込めるはずもなく、髑髏は無言で2人の傍らに立ち、その掛け合いが終わるのをじっと待った。

やがて言葉が尽きたのか綱吉が黙り込み、それを見てニヤリと笑いながらリボンがこちらへ目をやる。

黒く大きな瞳が髑髏を見据えた。

赤ん坊のようなその外見はとても可愛らしいのに、深層に潜んだヒットマン特有の鋭い光が、奇妙なほどにアンバランスさを醸し出す。

髑髏はゆつくりと深呼吸して、口を開いた。

「私に…何か、用？」

小首を傾いで尋ねた彼女に、リボーンは「ああ」と言っ、ごくんと可愛らしく頷いた。

中身がアレじゃなかったら本当に可愛いのに。綱吉が心の中でそう呟いたかどうかは定かではない。

「クローム。お前、今日はツナン家でメシ食ってけ」

「…え？」

「え？」

髑髏はもちろん綱吉も、きよとんとして家庭教師を見つめ返す。

しかしリボーンはそんな2人にも頓着せず、自分勝手に話を進めていった。まあ、いつものことであるが。

「ぼけつとすんな。行くぞ」

「ちよ、待てよりボーン…」

「今日は夏野菜カレーだって、ママンが言ってたぞ。量はあるから一人ぐらい増えても大丈夫だ」

「いや。そうじゃなくて」

「クローム、帰りは送ってやる。なんなら泊まってっても構わねーからな」

「人の話を聞けー！！」

綱吉の叫びをさらりと流し、リボーンはぴょんと髑髏の肩に飛び乗る。

女の子の肩だから、幅が狭くて少しバランスは悪そうだが、リボーンはまるつきり平気そうだった。

髑髏は途惑いながらも、その双眸を見つめ返す。

「気持ちは嬉しい…けど。でも、犬と千種が」

「あいつらにはもう伝えた。さっさと行くぞ」

「リボーン！」

結局。

紅に誓う

半ば強引に引っ張られるようにして、2人は家庭教師と共に沢田家へ向かった。

## 光

窓の中に、暖かな光が見えた。

まだ太陽は沈んでおらず、空を見上げれば明るく感じるぐらいのはずなのに、無言で道を歩いていると、なぜか闇の中に放り込まれたような、うすらさむい感覚に襲われる。

だからこそ、それを見た途端ホツとした。

髑髏が手に入れられなかったものを、ボスは生まれながらもっていったのだ。

羨ましいとは思わない。

むしろ切なかった。

優しい優しいこの少年が、きっと、将来は失ってしまうであろう光だから。

「あらまあ」

「…あの、母さん。この子は髑髏って…」

「あらあらまあまあ」

髑髏と綱吉を交互に見比べて、奈々は目をぱちくりさせながら「あらまあ」を繰り返した。

「ツッ君、京子ちゃんやハルちゃんはどうしたの？ まさかあなた、

二股だけじゃ飽きたら三股を…」

「違う違う違う！ 何言ってるんだよ母さん、3人とも彼女とかそんなんじゃないから！」

「そうなの？」

「そうなの！ 髑髏は…その…友達だよ。友達」

「あら」

奈々は口元に手をやってパチパチと目を瞬くと、苦笑にも似た表情を浮かべ、髑髏に向かって微笑んだ。

「ごめんなさいね。えーと…髑髏ちゃん。おばさんったら勘違いしちゃったわ」

「…いいえ」

「リボン君から聞いたんだけど、お夕飯いっしょに食べてくれるんですって？ 嬉しいわ。ビアンキちゃんが出掛けてるから、食卓に華がないなあって思ってたところだったのよ」

「えっ、ビアンキいないの？」

「食材探しに行く、って言ってたわ」

「へ…へ…え…」

ビアンキにとっては、食材〓殺しの道具、である。

もしかして仕事の依頼でも入ったのかな…まさか俺のためじゃないよな、と少し悪寒を感じながら、綱吉は頬を引きつらせて相槌を打った。

「さあさあ、早くあがってちょうだい。カレー、もうほとんど出てるのよ」

やけに明るい奈々の笑顔。

イーピンちゃんとランボくんも待ちくたびれてるんだから、と急かされた綱吉は、なんとかポイズンクツキングの恐怖を頭から振り払って、髑髏を伴いリビングへと向かった。

「ツナ…っ、おみやげっ」

「…あのな、ランボ。何度言ったら分かるんだよ。学校行ってきただけなのにお土産なんか買ってくるわけないだろ」

「なーんだ、つまんね。ツナのケチケチケチケチけえーち！ けちんぼっ」

「お前なあー！」

リビングに入るなり、ランボが綱吉に飛びついてきた。

相変わらずのウザさである。

綱吉は鞆を下ろしながら、足にへばりつくその子牛を引きはがそうと躍起になった。

髑髏は最初、それを見て少しビックリしたように固まっていたが、

ふとランボの顔をまじまじと見つめたかと思うと、「あ。」と小さく声を発した。

「ん？ どうした髑髏」

「この子、どこかで見た顔」

「え…。そりゃそうだろ。守護者は大空戦で一回、みんな顔合わせてるはずだし」

「ううん、それだけじゃないの。確か…リング争奪戦の前にも会った…」

「あーっ、あのときイタリア語の練習してたパイナップル女だ！」  
「！」

「こ、こらランボ！ いきなり何言ってるんだよ！」

綱吉が慌ててランボの口を塞いだけど、それでもランボはむーむー唸りながら、髑髏の頭を ……正確には髪型を指さし、ジタバタしている。ウザイうえに、しつこい。

いつまでも口を塞ぎつづけては窒息してしまうと思ったのか、綱吉は仕方なくランボを解放した。

すると、それ幸いと言わんばかりに、ランボは笑いながら髑髏の周りを飛び跳ねる。

「パイナップル、パイナップル！ ガハハハハ、変な頭〜！」

「…！」

「ランボっ、いいかげんにしろ！」

「そうだ。うぜーぞアホ牛」

「ぐぴゃっ」

どこからともなく跳んできたりボーンの蹴りが見事にランボの顔をえぐり、とりあえず暫くは静かになった。

十年バズーカを出す暇もなく、ランボは気絶してしまったのだ。さすがりボーン。格下だろうが容赦がない。

ちなみにこのとき、奈々はキッチンの奥でカレーをかき混ぜつつ鼻歌を歌っていたので、何が起こったのかはいまいち気づいていなかった。ひょいと顔を出し、のほほんとしながら「ケンカしちゃうダ

メヨー？」などと言い置くと、再びカレー鍋の方へと向かっていった。

綱吉がわたたしなから頭を下げる。

「ご、ごめんなつ、髑髏。ランボも悪気があつたわけじゃなくて…いや、だからこそタチが悪いんだけど…」

「いいよ…ボス。気にしてないから」

言いながら、髑髏は溜め息を吐いた。

表情には出ていないが、内心は物凄くショックである。

髑髏は自分の髪型が気に入っていた。見た目が少し変わっていることは解っていたが、そんなことはマイナス点にはならなかった。

何しろ、あの骸様との「おそろいヘア」なのだから。

髑髏は壁の方を見つめながら、じつと俯いた。

「…」

「あつ、え、えつと。カレー！ そうだ、カレー食おうか。なつ？」

「随分お粗末な誤魔化し方だな。誤魔化しきれてねーぞ、ツナ」

「うるさいよ！」

ツナがリボンに向かって吠え、イーピンがランボの頬をぺちぺちと叩いて起こしていた。

「髑髏ちゃん、味はどうかしら」

「おいしい…です」

「まあ、本当？ よかつたわあ、どんどん食べてね！」

奈々がにこにこしながら子ども達の様子を眺めている。

髑髏は少しずつカレーを口に運びつつ、なんだか不思議な気がしていた。

幼い頃の記憶の中。奇妙な違和感。 … 『母親との食事』と

は、こんなにも和やかだったのだろうか？

「髑髏、どうしたんだ？ ボツとして」

「あつ…なんでもない」

思い出していた。

母親が自分を見やるときの、冷たい表情。

一緒に食事をして楽しかった記憶など無い。

すっかり食事をこぼせば、服を汚すなと怒られ。

話をしようと言を聞けば、はしたないから黙って食べなさいと突き放され。

いつしか、自ら心を閉ざすようになった。そうした方が楽だと思っただし、実際にそうだったのだから。

期待して裏切られるぐらいなら、最初から何もしない方が、ましなのだ。

「ガハハハハ！ ランボさん、おかわり〜っ」

「ランボ。ちゃんと椅子、座る。食卓上に立つ、不可！」

口の周りをカレーまみれにしたランボが大騒ぎして、それを隣のイーピンが窘めている。

奈々は、ランボに差し出された皿を「はいはい」と受け取って、穏やかに微笑みながらおかわりをよそってやっている。

「おい、茄子とピーマン残すなよ」

「残してるんじゃないもんね！ あとで食べようと思って取っといてるだけだもんね！ ツナ早とちり〜」

「なっ！」

「ほらほら、ケンカしないのよ」

… あったかい。

沢田家のリビングは程よく冷房が効いていたけれど、それとは別に、胸の奥がじんわりと熱を持った。

室内を照らす光が、やけに眩しい。

髑髏は、子ども向けに作られたのであろう甘口カレーをゆっくりと飲み込むと、誰にも気づかれないうつ、静かにそっと目を閉じた。そうでもしないと、涙がこぼれそう。

紅に誓う

それぐらい、この場所はあたたかかった。

哀

マフィアを憎んでいる。

あの人が憎んでいるから、私もマフィアは嫌い。けれど。

『ボンゴレとか、マフィアとか。俺はそんなもののために戦えない』  
『友だちが…仲間が傷つくのだけは… …嫌なんだ!』  
『…目の前で大事な仲間を失ったら…死んでも死に切れねえ』  
『鬻體は、友だちだよ』

ボス。

私を仲間だと言ってくれた。

あの人以外で、初めて私を受け容れてくれた。だから。

私はボスに従うの。

マフィアを好きになることは出来ないけれど、でも、ボスのことは嫌いじゃないから。

私が必要とされているなら、出来る限り、力になりたいと思うから。

骸様。

こんな私を、あなたは どう思うでしょうか

…。

紅に誓う

泊まっていけばいいのに、と言う奈々の申し出を断って、鬻體は

家路についた。

骸に命を救われて以来、黒曜の廃墟が髑髏の家だ。

犬にはまだ認めてもらっていないし、千種は相変わらず黙りだけれど、でも髑髏はあの場所が好きだった。だんま

寂しくないと言えは嘘になる。だけど、息苦しかった母親との生活よりも、ずっと自分らしくいられる気がしていた。何より、骸が望んだことなのだから。髑髏に、犬や千種と行動を共にするようにと。

髑髏は、骸と2人を繋ぐ通信役。少しでも必要とされているのなら、その役目を可能な限り果たそうと思っている。

もう、それ以外に自分の居場所を見つけられないから。

「髑髏」

「…なに？」

立ち止まって振り返る。

一応、1人でも平気だと言っただけで、結局はリボンの「ボスなら送ってやれ」の一言が決定打だった。

薄暗くなった道の真ん中。髑髏の隣を歩いていたはずの綱吉が、いつのまにやら数歩分ほど後方に佇んでいる。髑髏はゆるりと首を傾げて、どうしたの、と問いかけた。

いつになく静かな表情だ。

くるくるとよく変化する表情が綱吉の特長であったはずなのに、現在の彼にはそれが無い。

俯き、何かを深く考え込んでいる様子だった。

「ボス…？」

髑髏が呼ぶと、彼はゆっくり顔を上げた。

どくろ、と。綱吉の唇が自分の名前を紡ぐのを、髑髏はどこか遠く感じる。

「会いたい…か…？」

「え…？」

「骸に…会いたいのか…？」

視線が絡んだ瞬間に、息が止まるかと思った。  
いつもの彼ではない。やけに静かな、ひどく優しい声。  
まるで、全てを見透かしているような……。

ああ、そうか。

髑髏は小さく息を吐き出して、肩の力を抜いた。

ゆっくりと、一瞬でも動揺したことを悟られないようにと、彼女は静かに口を開く。

「ボス…それ、超直感？」

僅かな逡巡の後、綱吉はおそろおそろ頷いた。

湖面のように静まりかえった表情は消え、普段の彼らしい、困ったような苦笑が浮かび上がった。

「なんとなく…だけど。そんな気がしたんだ。ごめん」

「謝らなくていいよ」

蝉の声と、鈴虫の声が重なって聞こえる。

おだやかな晩夏の夜。9月の初旬。夏の終わり、秋の始まり。

ふっと通り抜けた夜風に目を細めて、綱吉の質問に答えるべく、髑髏は口を開いた。

それはひどく曖昧なものだったけれど。

「会いたい…のかな。自分じゃ、わからない」

「えっ。なんで…？」

「だって、現実世界で骸様と会う、ってことは…骸様が本当の体を取り戻すってことだもの」

綱吉が微かに目を瞠った。

髑髏は穏やかに空を見上げる。薄暮の中に、うつすらと一番星が光った。

「それは、とても良いことだと思う。きっと犬も千種も喜ぶ。私も嬉しい。…だけど」

綱吉の方を見やって、髑髏はあくまでも淡々と続ける。

「そうしたら、私はもう用無しなの」

骸が復讐者の牢獄から出られれば、もう通信役は必要なくなる。形代として髑髏を生かす理由も、同時に消えてしまうのだ。だから。

骸が本当の体を取り戻す。そのときが来たら、多分、私はもう

…。

「あの人に殺されることは、全然、構わないの。だって、あの人に救われた命だから」

… 凧。 凧：僕には君が必要です。

初めてのことだった。

必要だと言ってもらえて、嬉しかった。

こんな私でも生まれてきた意味があっただと、心の底から救われて。

この人のためなら何でもしようと、自分自身に誓った。

骸様。 骸様。

あなたの負担にはなりたくない。少しでも役に立てるよう、頑張るから。

だから。

形代として… 道具として、もう少し、あなたの傍にいさせて下さい。

「ボス、私はね」

髑髏はそつと、自分の下腹部へ手をやった。

あたたかい。

幻覚で作られた内臓… たとえまやかしなのだとしても、それらは今、こんなにも力強く、しっかりと機能している。

骸がまだ、自分を見捨ててはいないという証。

「あの人に… 骸様に、生かしてもらっているの。だから、骸様の役

に立てるなら何でもする。…そりゃ、死ぬのが怖くないとは言えないし、少し寂しいとも思うよ。死んだら、ボスや皆にも、二度と会えなくなっちゃうものね」

「髑髏…」

「そんな顔しないで、ボス。命を粗末にしようなんて思ってないよ。でも、骸様に捨てると言われたら、いくらでも捨てられる覚悟は出てくるの。…マフィアって、そういうものなんですよ」

沈黙が流れた。

破ったのは、綱吉だった。

「髑髏も…マフィアが憎いのか？」

「骸様が憎んでいるものは、私も嫌い」

彼女にしては珍しく、ぴしゃりと突き放すような言葉だった。

綱吉は思わず怯み、相手に近づきかけた足を退いて、歩みを止める。

そんなボスを見て、髑髏は「ごめんなさい」と少し顔を曇らせた。「ごめんなさい。やっぱり私も、マフィアは好きじゃない。…でも、ボスのことは、」

一瞬だけ迷ったかのように瞳が揺れる。

髑髏は表情の消えた顔で、じっと相手を見つめた。

「…ボスのことは、仲間だって思ってる。友だちだって言ってくれて…嬉しかった」

「そっか」

綱吉は、ふわつと力が抜けたように笑った。

それならいいや、と。安心しきった顔。

とてもマフィアの次期ボス候補には見えない、幼くて頼りなさげな笑みだった。

「この辺まででいいよ」

「そっ?」

「うん。これ以上は、ボスの帰りも遅くなっちゃうから」

廃墟まで後少しのところ、髑髏がそう言った。

送ってくれてありがとう、と、相変わらず抑揚の乏しい口調で告げる。

ただ、心がこもっていないわけではない。彼女は感情を表すときの変化が、人より少し乏しいだけなのだ。最初の頃は途惑ったけれど、今では綱吉もちゃんと解っていた。

「じゃあな、髑髏」

手を振って、綱吉が去っていく。

その背中を暫く見送っていた髑髏だったが、急に何を思い立ったのか、自分でも無意識のうちに「待つて」と彼を呼び止めていた。多分いちばん驚いたのは、他でもない彼女だろう。

「ん、どうかしたのか？」

数メートル離れた場所で、綱吉がこちらを振り返る。

髑髏は内心おろおろしながら、それでも自分の口が勝手に動いてしまつのを止められなかった。

「あの…ボスは」

「うん？ 俺が何？」

綱吉が首を傾げながら、髑髏の言葉を待っている。

こうなったらもう誤魔化しきれない。

小さく息を吐いて、彼女はボスを見据えた。

「ボスは…骸様のこと怖い？」

綱吉が目を見開く。

多分それは、ずっと心に引っかかっていたことだった。

髑髏は、綱吉と骸の出会いを詳しくは知らない。ただ、聞いた話では、それは最悪と言ってもいいくらい悲惨なものだったらしい。

骸が並盛を襲って、綱吉の仲間を傷つけたという話は、本人の口からも聞いたことがある。

でも、それなのに綱吉は、霧の守護者として六道骸を受け容れた。完全に信じたわけではないのだろう。だが、少なくとも拒絶はし

なかった。守護者戦を終えた骸に、「ありがとう」と礼を言いたく  
らいなのだから。

過去の敵に対して、本当にどこまでも甘い男だと、骸が呟いてい  
たこともある。

「…」

綱吉は眉を寄せて、考え込んでいた。

困らせてしまったのだらうかと後悔したけれど、一度口に出して  
しまった問いかけはもう引っ込めることなど出来ない。

髑髏は無言で、綱吉が再び口を開いてくれるのを待った。

やがて顔を上げた彼の、その言葉は。

「そりゃ…ぜんぜん怖くないって言ったら、嘘になるよ。あいつの  
やったことは、理由はどうあれ、絶対に許しちゃいけないことなん  
だし」

まだ頭にこびりついている。

黒曜ヘルシーランドでの戦い。傷ついて倒れた仲間。流れる血。

骸の笑い声。殺されるかもしれない恐怖。

それらすべてに打ち勝ったからこそ、今の綱吉が在る。

リボンに言われたとおり、骸のやったことを、自分は絶対に忘  
れてはいけない。

でも。

「憎みきれないんだ。不思議だけど。俺…骸のこと、そんなに嫌い  
じゃないかもしれない」

犬に教えられた、3人の壮絶な過去。そして守護者戦で見えてしま  
った映像が、綱吉の心の奥底を締めつけていた。

エストラーネオファミリーの人体実験。そのモルモットとして、  
地獄の苦しみを味わった3人。

骸を心から慕う、犬と千種。

そんな2人を助けるために囷となった骸。

あんな冷たい場所に、たった1人で閉じこめられて。

「同情するってわけでもないけど、さ」

彼を可哀想だとは思わない。

彼が何人も人間を殺し、仲間を傷つけたことは、綱吉にとって揺らぎようなない事実だ。

でも。

だからといって、すべてが彼のせいだったなんて、一体どうして言えるだろう？

「もしも……」

綱吉は顔を上げて、髑髏と目が合うと微苦笑を浮かべた。

「有り得ない話だけどさ。…もしも、全く違う世界で、全く違う出会い方をしていたら」

骸も、犬も、千種も。

マフィアと何の関係もない、ただ一人の人間同士として、出会うことが出来ていたなら。

「俺たち、友達になれたかもしれない」

それは絶対に有り得ない幻想。

ひどく哀しそうに、綱吉が苦笑する。

髑髏は、じっと佇んで、相手を見つめていた。

身動きすることさえ躊躇われるほど、綱吉の横顔は哀しそうだった。

## 想

もしも、なんて言葉、口にしたらって意味がないと分かっている。目を逸らしてしまいたい現実の前で、いくら「もしも」を繰り返したって、楽になれるはずがない。

むしろ、余計に苦しくなるだけだ。絶対に叶わない想いを、自分で自分に突きつけるようなものだから。

「こんにちは、クローム」

「骸様」

その晩、髑髏は精神世界で骸と会った。

自分からその場所に行ったのか、それとも骸に呼ばれたのか、そのあたりは記憶がひどく曖昧だ。もしかしたら両方かもしれない。綱吉と別れたあと1人で廃墟へ帰って、骸のことを考えながら眠ったら、気づいたときにはここにいた。

精神世界は相変わらず、よく分からない場所だ。

一体どこをイメージしたもののだろうか、果てしなく広がる草原と、淡く光を反射する湖。時折、さらさらと風が吹きぬける。空は薄い青色で、まるで春と秋を混ぜ込んだように淡く感じられた。

骸は木陰に腰を下ろしていて、髑髏に気づくと、いつものように悠然と微笑んだ。

まるで全てを解っているとも言いたげに。

「骸様：聞いてた…？」

その隣へ躊躇いがちに座りながら、髑髏が尋ねる。

主語をばぶいた問いかけだったが、骸はその意味を正確に受け取ったようだった。

「君とボンゴレの会話のことですか？ …もちろん聞いていましたよ。君を通して、現実世界のことは全て僕の方に流れ込んでくる。」

そう言ったでしょう」

「はい」

髑髏は、そつと窺うように骸の方を見た。

彼の横顔はひどく静かで、笑みさえ浮かんでいないもの、それは素顔を隠すための仮面のようにしか見えない。

骸が他人に本音をさらけ出すことは　　相手がたとえ、犬や千種であろうとも　　滅多になかった。

髑髏はふつと小さく溜め息を吐いて、ぼんやりと空を見上げる。

雲が一筋、風に乗せられて流れていった。

「骸様。ボスは、骸様のことを嫌いじゃない、つて。憎みきれない、つて。…どうして、あんなに哀しそうだったんでしょうか。全然、マフィアっぽく見えなかった。なんで…」

「さあ、知りませんね」

微笑んだ表情のまま、骸は冷たく言い放った。

髑髏が口をつぐむと、彼はゆっくりと手を伸ばし、彼女の頭をやるわり撫でてやる。

「余計なことを考えないでください、クローム。君は僕の形代。僕のためだけに存在する、お人形なんですよ」

「わかつて…います」

「そう。それならいいんですが」

骸は言いながら頷いて、髑髏を自分の方へ引き寄せた。

こてん、と。彼女の頭が骸の肩にもたれかかるような体勢になる。精神世界でありながら、2人は、互い呼吸や脈動をしつかりと感じていた。

不思議な感覚に沈み込んでいくように、どこか心許ないぬくもり。指先は少し冷たかったけれど、頬に触れる骸の肩は温かい。重かったところから、じんわり伝わる体温。

これが幻覚なのかそうでないのか、髑髏は区別がつかなくなってきた。

だってほら、この人はこんなにも優しい。

「骸様」

呼ぶと、彼がこちらを見た。

そのオツドアイを、髑髏はじっと見上げる。

むくろさま、と。彼女は口を開いた。

「世界を醜いと思いますか」

「ええ」

「マフィアが憎いですか」

「ええ」

「人間が嫌いですか」

「ええ」

「じゃあ、」

髑髏は起きあがって、真正面から骸を見つめた。

「犬と千種のこと好きですか」

「…ええ」

少し驚いたように目を見開いた後、骸はにっこりと微笑んだ。

「2人は、僕の大事な“道具”ですから」

髑髏はふつと目を細めた。

ああ、やっぱりこの人は優しい人だ。

「骸様」

「はい」

「骸様なら…あのとき、何て言いましたか」

「あのとき、とは？」

「ボスが…友達になれたかもしれない、って…言ったとき」

「ああ。そのことですか」

表情とは裏腹に、吐き捨てるかのような響きがあった。

骸は湖面を見つめながら樹に寄りかかると、目をすがめて言葉を

続ける。

「くだらない。もしもの話なんて、くだらないですよ。どれだけ繰

り返したところで、意味がない」

「…そうですね」

もしも出会いが違っていたら。

もしも違う立場で出会っていたら。

そんなもの、言ったところで何になる。

自分たちはもう、出会ってしまった。それも最悪の出会い方。戦い合って傷つけ合って血を流し合って。本来ならば、敵として憎み合うはずだった間柄。

今さら仲間と呼ばれても、馴れあうことなど真っ平だった。

「でも、ボスは知っているみたいだった。骸様が、犬と千種のために捕まったことも。こうして、私の命を救ってくれていることも。だから憎めない、って」

「ああ。…幻覚汚染の時に、僕の記憶の一部が彼に流れてしまったみたいですね」

「骸様、やっぱり骸様は、犬と千種のことを、」

言いかけたクロームの口元に手を添えて、骸は言葉を遮った。

左右で色違いの目をやわらかく細め、微笑む。

「犬と千種は、僕の“道具”です。勘違いしないでください、クローム。僕が2人を助けたのは、僕が強欲な男だったからですよ。たとえ、たかが道具であろうとも…僕は、自分の所有物が他者に奪われることなど、我慢ならない性分なんです。わかりますね。

僕に、仲間やら友達やらは必要ない。必要なのは、素直に言うことを聞いてくれる道具のみ」

「…骸様」

「もちろん、君もですよ。かわいい僕のクローム。大事な大事な…僕の人形です」

「はい」

髑髏は泣きたくなかった。

道具扱いされたことが悲しいのではない。むしろ嬉しかった。大事だと言ってもらえた。自分はまだ、この人に必要とされているの

だと。

だからこそ、つらかった。

この人の傍にいられなくなる、その日が来ること。

一度は失いかけた命なのに。生が終わることに安堵していたはずなのに。この人に救われて、もう一度生きたいと思うようになってしまった。叶わない幸福を望んでしまった。

ずっと傍にいさせてほしいなんて、そんな、許されないことを。

「お役に立てるよう頑張ります、骸様」

そう呟いて、髑髏は再び骸の肩にもたれかかった。

彼のぬくもりに額を押しつけながら、こぼれそうな涙を懸命に堪える。

どうか。どうか。

もう少しだけ、傍にいさせて。

朝

クローム。ひとつ、伝言を頼まれてくれますか。  
はい…なんでしよう。

犬に、少し大人しくするようにと。最近ちょっとイライラしてる  
みたいですからね。君や千種も、あたられて大変でしょう。

いいえ、そんなことは、  
クフフ。誤魔化さなくてもいいですよ。ああ、それから千種にも…  
千種にも？

「おい、起きろっ、バカ女！」

「ん…」

目を覚ますと、犬が怒ったようにこちらを睨んでいた。

「お前、なんれそんなところで寝てんらよ」

「あ」

髑髏が寝ていたのは、古びたソファの上だった。

昨日、ちよつと休むつもりで横になったのだが、結局あのまま朝  
まで眠りこけていたらしい。

「寝るなら他んとこ行けよな。風邪ひいたらどうすんら」

「え…私のこと…心配してくれたの？」

「違う！ お前じゃなくて骸さんらつつの！ お前が体壊したら、

骸さんまで出てこれねーんらからなっ。気いつける」

「そうだね…ごめん」

髑髏はふわりと目を細めて頷いた。

たとえ骸のためだとしても、犬が自分の体を気遣ってくれたとい  
う事実が、嬉しかった。

「んで？ 骸さん、何て言ってたんらよ。話したんだろ？」

「あ…うん」

犬の言葉に、髑髏は昨日のことを思い出そうと頭を巡らせる。

あの後、取り留めのないことをいくつか話したのだが、記憶が大分あやふやになってしまっていた。

「えっと、暫く大人しくしておきなさい、って」

「は？ どういう意味だそれ？」

「千種にあんまり迷惑かけちゃダメ、って」

「わけわかんねー」

「ごめん…私もよく分かんない」

「しつかりしろよなー！」

「うん、本当にごめん。…あ、それから、千種に」

「…俺が何？」

いきなり部屋の奥から、千種がのっそり顔を出した。

犬が驚いて「おわっ」と仰け反り、髑髏もビックリしたように目をぱちくりする。

暗がりから急に人間が現れたりすると、たとえそれが顔見知りの者であったとしても、かなり心臓に悪いのだ。

数秒後。ハツと我に返った犬が千種に向かって吠える。

「ビックリさせんじゃねえびよん、くされ眼鏡！」

「そっちが勝手にビックリしたんだろ。いちいち騒がないでよ…めんどい」

眼鏡を押し上げつつ小さく溜め息を吐いてから、千種はちらっと髑髏を見やった。

「それで…骸様が、俺に何だった？」

「あ…えっと」

言われて、髑髏は慌てて記憶をたぐり寄せる。

うまく思い出せない。先ほどのショックで、少し忘れてしまったらしい。

「がんばりなさい、だったかな…」

「何を？」

「…犬の世話…？」

「はあっ、なんだそりゃ!？」

目を剥いて叫んだのは、もちろん千種ではなく犬である。

髑髏は「ごめん」と目を伏せて、少し迷った後に千種を見上げた。

「驚いたシヨックで…ぼんやりとしか覚えてないの。多分…おおまかな内容は、さっき言ったことで合ってると思うけど」

「ふーん…いいよ。それなら」

「よかねーびよん! なんらよっ、犬の世話って! 俺がいつ柿ピ

ーの世話になっただっーんら!？」

「…」

「…」

「2人して黙んじゃねーッ! 目え逸らすなー!!」

そうやって大騒ぎすることが、千種に世話をかけてしまう理由の1つなのだが。

犬は、そのことに全く気づいていないらしかった。

「…また出掛けるの？」

「うん」

学生鞆を持ち、廃墟を出ようとした髑髏に、珍しく千種が声をかけた。

その問いかけに頷いて、髑髏は淡々と言う。

「ちよつと、用事が出来て」

「並盛？」

「…知ってたの？」

髑髏が少し驚いてみせると、千種は壁に寄りかかりながら眼鏡を押し上げた。

「昨日、アルコバレーノの家庭教師が来た。ボンゴレのところまで、夕飯ご馳走になったって？」

「うん。おいしかった。…だからお礼を言ってこようかな、って」

「そう」

2人とも、まったく表情を変えずに会話している。もちろん口調にさえ抑揚はなく、まるで機械のように単調な声。

ここに第三者がいれば間違いなく「気味が悪い」と思うだろうが、2人にとつてはこれが普通だった。

むしろ彼らの場合、いきなりハイテンションになられたって余計に怖くなるだけである。

千種は、犬と同様に、ボンゴレ含むマフィア全般を毛嫌いしていたのだが、次期ドン・ボンゴレの沢田綱吉に関しては別だった。犬のように攻撃的ではなく、かといって綱吉に好意を示すわけでもない。あくまでも無関心を貫き通している。

そんな彼の本心を、髑髏は聞いてみたいとも思ったが、今はそのときではないと思った。

まだ、自分は完全に彼らに受け容れてもらったわけではないのだから。

内面にずかずかと踏み込むような真似はしたくなかった。

「じゃあ、行ってきます」

律儀にそう言って廃墟を出てきた髑髏は、暫く歩いたところで立ち止まり、ふっと思いついたように空を見上げた。

ああ、夏が終わる。唐突にそう思った。

日中はかなり暑いが、朝と夜は大分すこしやすくなってきたし、何より空の色が変わってきたように感じる。

真夏の象徴とも言える、眩しいくらい明るい群青色の空。つい先日まではそうだった。

しかし今、髑髏が見上げているこの空は、それに一枚ほど透明な布をかぶせたような、淡い青色をしている。

夏が終わる。

髑髏は小さく息を吐いて、再び歩き出した。

刻々と“秋”に変化していく周囲の風景を、なるべく見ないようにしながら。

紅に誓う

現

自分らしくないな、と髑髏は思った。

こんなふうに、自分から誰かに会いに行くことや、自分の気持ちを伝えようと行動しているだなんてこと、以前の自分なら、絶対に有り得なかったことだ。

「私、少しは良い方に変われてるのかな」

立ち止まって、そんなことを呟いてみる。

もしそうだとすれば、それは骸や綱吉のおかげだ。

変わるチャンスを与えてくれた骸。自分を認め、受け容れてくれた綱吉。

嬉しかった。本当に嬉しかった。

だから。

「ありがとう、って」

伝えたいのだ。

紅に誓う

「おーい、髑髏！」

「ボス…？」

呼び止められて振り向くと、今ちょうど会いに行こうとしていた相手がこちらに走ってくるのが見えた。

髑髏はビツクリして、鞆をぎゅっと抱き込んで目を丸くする。

駆け寄ってきた綱吉は少し息を切らしながら、「よく会うな」と言って笑った。

「どうしたんだ？ 今日って休みじゃ…」

「ボスに会いに行こうと思って」

「え？」

「ボスのお母さんにも。…お礼が言いたかったの」

「そんな、気にしなくていいのに。リボーンが言い出したことなんだしさ」

今度は綱吉がビツクリする番だった。わたたと慌てたように相手に手のひらを向け、肩の辺りでワイパーのように動かしている。

対する髑髏は淡々としていた。

「でも言いたい。伝えておいてくれる？ カレーごちそうさまでした、って。おいしかったから」

「う、うん。わかった。言っとくよ」

とりあえず頷き、綱吉はへらりと笑みを浮かべた。

…やっぱり、マフィアっぽくない。

骸との会話を思い出しながら、髑髏はぼんやり思った。

「そういえば…ボス」

「うん？」

「ボスの方こそどうしたの？ 休みなんでしょ、今日」

「ああ」

綱吉は思い出したようにポンと手を打った。

その仕草が妙に幼く感じられて、彼の持っているボンゴレ10代目という肩書きに、髑髏は改めて違和感を覚える。

「俺も髑髏に会いに行こうと思ってたんだ」

「…え？」

「怪訝そうに首を傾げ、どうして、と尋ねる。」

しかし綱吉は、それを問われると困ったように頭を掻いた。

「んーと…なんでだろ？」

「？」

「急に思い付いたんだ。行かなくちゃ、って。…そんな気がして」

「…超直感…？」

「うん、多分ね。自分じゃ、なんだかよく分からないけど…最近こ」

ういうこと多いんだ」

綱吉は苦笑して、思い出すように目を細めた。

「こないだも…ちょっと胸騒ぎがするな、って思ってた獄寺君のところにいったら、不良と乱闘騒ぎになってたり…なんとなく気になって野球部の練習を見学に行ったら、山本がケガしそうになってたり。どうしてなのか…リボンに聞いたらさ、超死ぬ気モード以外でもブラッド・オブ・ボンゴレがちょっとずつ働くようになってきた証拠なんだって…言ってた」

ふつと顔に影が差す。

まただ。また、あの哀しそうな表情。

髑髏は息苦しさを覚えた。胸の辺りを締め付けられるような。

「…ボス」

「あつ、ごめん。ボーツとしてた。…えつと…とりあえず、そういうことだから。たぶん、今回は俺の勘違いなんだよな。髑髏、見たところ元気そうだし。何事もないんなら、俺はもう帰…」

「あつたよ」

「えつ？」

「…あつた、よ」

自分でも無意識のうちに呟いて、髑髏はすつと俯いた。

脳裏をよぎるのは、例の夢のことだ。

骸骨。

あのとき、いったい何を言おうとしたのだろうか？

「髑髏？」

綱吉が心配そうに声をかける。

本当なら、ここで「なんでもない」と言って話を断ち切る方が無難なのだろうけれど、でも今の髑髏にはそんな余裕がなかった。なぜだか知らないが、綱吉の傍にしていると緊張の糸が切れて、夢の中で味わった言いようのない不安が、一気にフラッシュバックしてしま

う。  
鞆の持ち手の部分をぎゅっと強く握りしめて、髑髏は掠れるよう

な声で言った。

「…なの」

「え？」

「不安…なの。本当なら、私は死んでいるはずだったから」

現実世界のことは全て流れ込んでくると言っていた、骸。

だったら彼は今、自分が話していることを全部わかってしまっているのだろうか。この情けない言葉も、それを吐き出している相手が、彼の忌み嫌うマフィアのボスだということも、全部。

髑髏はそう考えたけれど、一度あふれてしまった言葉を止めることなど出来なかった。

「骸様のお役に立てれば…それで満足だったはずなのに。不安に思うことなんか、なかったはずなのに」

ぼろぼろと、考えるまもなく言葉が出て来た。

涙こそ出なかったけれど、心の中はもうぐちゃぐちゃだ。

こんなこと言うつもり、ないのに。

止まらない。

「…私なんかが、こんなこと思っちゃいけないんだって、解ってる。解ってるの。でも…わたし、私は…骸様が好き。

千種と犬も、ボスも、みんな好き。好きになっちゃった。一緒に生きたいって…死ぬなら一緒にいい、って。そんなこと、願っちゃ駄目なのに。こんなワガママ、言っちゃいけないのに、…私…どうして、」

「…髑髏」

名前を呟くように呼んで、綱吉が瞠目した。

驚いているのだ。こんなにも感情を露わにしている彼女を、見たことがない。

「夢を見たの」

俯いて、髑髏は言った。

「怖かった。手を伸ばしても骸様に届かなかった。それなのに、私、必死で手を伸ばしてた。…聞こえなかったの。骸様の声。ぼんやり

して…夢から覚めた瞬間、ぜんぶ霞んできたような感じだった。本当に怖かったの。自分の考えすぎだって言い聞かせても、怖くて怖くて怖くて…」

止まれ。止まれ。

どうして、私はいつからこんなに弱くなった。

…もともと強くないことぐらい、解っていたけれど。

「おい、髑髏…髑髏？」

急に言葉が途切れて、それっきり黙り込んでしまった髑髏を心配して、綱吉は焦ったようにその名を呼んだ。

しかし、いくら呼んでも応えはない。不安になった綱吉は、彼女の肩を掴んで揺すった。

「髑髏。どうしたんだよ…どく…」

「クフフフ」

「ろ、…のわああっ!？」

不気味な笑い声に、綱吉が勢いよく ずざざざざざと後ずさる。冷や汗をたらりと流して、彼はおそろおそろ口を開いた。

「む、むく…ろ？」

「お久しぶりです、ボンゴレ」

にっこりと微笑んだ彼女の表情は、どこか雰囲気違っていった。いや、もとより髑髏は、滅多に微笑んだりはしないのだから。

外見は髑髏のままだったが、どうやら中身だけが骸に入れ替わっているらしい。

「なっ、なな、なんで…どういう…?」

「この子は、少し混乱しているようでしたからね」

言つと骸は、髑髏の胸にそつと手を置いた。…こういう表現をすると何やらセクハラくさいが、現在、骸は髑髏の体の中にいるのだ。すなわち、骸自身の体、ということになる。あくまでも彼の持論だが。

「きつと、おかしいな夢を見たせいで神経が参ってしまったんでしよう。もとが繊細な子ですから。…これ以上、君に余計なことを言う

前に、精神世界で休ませてしまおうと思ったんですよ」

「だ、だからって、何もお前が出てくること……」

「おや。では、いきなり倒れた彼女を誰が運ぶんです？ 君が黒曜までおぶってくれるとでも？」

「……う。それは……ちよつと遠い……」

「でしょうね。少しはマシになったようですが、君、相変わらず貧弱そうな体してますし」

「……うっつ」

それを言われると、きつい。

がつくりと頂垂れた綱吉を見て楽しそうにひとしきり笑うと、骸は「それでは」と身を翻した。

「へっ？ ……え、おい、もう帰るのか？」

「何を言ってるんですか。君も知ってるでしょう？ 僕は、短時間しかこちらに留まれないんですよ」

骸はそう言うと、髑髏の声と顔でクフフと笑った。

「それとも、黒曜まで付き添ってくれるんですか？」

「え、それは……」

「やめておいたほうがいいですよ。…契約されたくなければね」

唇の端を歪めながら、骸は三又の剣を取り出して、綱吉の前にちらつかせる。

綱吉は思わず「ひっ」と声を上げて後ずさる。それを見て骸は再び髑髏の顔にニッコリと笑みを浮かべた。

「今は、手を出さないでおきますよ。この子が世話になりましたから」

そう言って、骸は去っていった。

道ばたに一人残された綱吉は、暫く呆然とその場に立つたが、やがて糸が切れたかのように、ずるずるとその場にしゃがみ込む。

「……まったく……なんなんだよ、あいつ……」

冷酷だったり、仲間思いだったり、不気味だったり、穏やかだっ

たり。  
どれにしたって底知れない恐ろしさを伴うことには違いがなかったけれど、でも綱吉は、彼の本性が一体どんなものなのか、気になつて仕方がなかった。

髑體の体に入った骸が黒曜に帰ると、そうとは知らない犬が怒つたように飛び出してきた。

「おい！ お前またマフィアに会いに行つたんらつて…な…あ？」  
雰囲気の違いに気づいたのか、語尾が尻窄みになる。

しばしばと目を瞬いて、犬は「骸さん？」と驚いたように言った。  
「ええ。ただいま、犬」

「どうしたんれすか。こつちに出てくんの久しぶりれすね！」  
うつてかわつて上機嫌になつた犬に小さく笑つて、骸は廃墟の中へと入つていった。

「骸様」

「ああ、千種」

ソファに腰掛けながら、骸はちよいちよいと千種を手招きした。  
なんですか、と千種が歩み寄ると、彼 外見は彼女だが  
は微笑んで、相手の手に鞆を押しつけた。

「クロームの鞆、運んでおいてください。僕は少し休みますから」  
「はあ…」

「頼みましたよ」

言つたきり、骸はソファに横たわつて眠り込んだ。  
千種や犬が声をかけようとしても、返ってくるのは微かな吐息のみである。

久しぶりに出て来たので疲れたのだろうか。いくらなんでも、寝付きがはやすぎる。

「…」

「柿ピー…骸さん、どうしたんら？」

紅に誓う

「……さあね」

溜め息を吐いて、千種は髑髏の鞆を片手に部屋の奥へ入っていった。

## 誓

目を開けると、そこには見慣れた世界が広がっていた。

草原。空。湖。

そして、赤と青のオッドアイ。

「こんにちは、クローム」

…骸様。

いつものように、水辺の大きな樹の陰に2人で座っていた。

髑髏はじつと黙り込んで、膝を抱えるようにして俯いている。

その場を、暫くは静寂が支配していた。

「クローム」

骸が呼ぶと、その細い肩がわずかに震える。

「夢を見たと言いましたね」

風が吹きぬけて、草原がざあざあと音をたてる。

やがて髑髏がおそろおそろ顔を上げると、骸の端正な顔を縁取る青みがかかった髪が、風にさらさらと揺られていた。

その、骸の表情はひどく穏やかで、だからこそ底知れないものを感じさせる。

暫く見つめ合った後、髑髏はそっと目を伏せた。

「…ごめんなさい、骸様」

「なぜ謝るんですか」

「…ごめん、なさい」

触れた手のひらが優しく、それ以外の言葉を見つけられない。

骸に肩を抱かれながら、髑髏は「ごめんなさい」を何度も何度も

繰り返した。

「全部、吐きだしても構いませんよ」

「…え？」

「不安なのでしょう。だったら、それを全て僕に言ってください」

「でも、骸様」

「いいんですよ。僕は気にしませんし…それに、へたに溜めこまれて、君が壊れてしまつては困りますからね」

髑體の目元を指先でかるく擦つてやり、骸は笑つた。

「わかりましたか？」

「はい」

ゆっくりと、髑體は話した。

夢の中で、必死に骸を探したことも。

手を伸ばしても届かなかつたことも。

骸の言葉を、聞き取ることが出来なかつたことも。

目が覚めたとき、ひどく悲しくなつたことも。

綱吉の傍が、綱吉の母の笑顔が、とても、あたたかかつたことも。それに泣きそうになつた自分がいたことも。

「私は愚かですね…骸様。あなたに与えて貰つておきながら、手放したくないだとか、もっと欲しいだとか、思うだなんて」

「そうですね？ 僕は、そうは思いませんよ。人間なんて、みんな強欲なものですから」

氷のような色をした空から、暖かな光が降りそそぐ。精神世界だから、実質的な暖かさは感じないはずのだけど、でも髑體は、確かにその光を「あたたかい」と感じていた。

それが幻覚だとしても、隣にこの人がいるなら、構わないと思っ  
た。

「クローム」

骸の指が髑髏の髪を撫でる。

まるで妹をあやすようなその仕草を、他の者にも見せたら何と言  
うだろうか。

目が合うと、骸は目を細めて言った。

「言ったでしょう？ 僕も、強欲な人間です。…だから君を手放す  
つもりはない」

髑髏が目を見張った。

その頬にそつと手を添えて、どこか淡々と骸は続ける。

「君はずっと、僕の傀儡として生きるんですよ、クローム。一度手  
に入れた忠実な道具を、僕は手放したりしません。それに利用価値  
がある限りはね」

「じゃあ、骸様…私…」

「君はもう、僕から逃げることなど出来ませんよ。死ぬまで僕の…  
僕だけの人形です」

まるで脅しのような言葉だったけれど、髑髏は嬉しくて泣き出し  
てしまった。

呆れられるかもしれないと思うのだけど、涙はそう簡単に止まっ  
てはくれない。

滅多に泣くことがない彼女だからこそ、なおさらコントロールが  
出来なかった。

「ありがとうございます。ありがとうございます、骸様」

ずっと傍にいても、いいのだと。

死ぬまで一緒にいられるのだと。

そのことがどうしようもなく嬉しかった。

心の中にわだかまっていた塊が溶けていくような、そんな感覚。  
途切れがちな声で、なんとか言葉を紡ごうとした。

ありがとうございます、と。

何度も繰り返した。

「骸様」

背を支えてくれる手のひらがひどく優しい。

「ありがとうございます。もう、不安に思ったりしません。…お役に立ちます。ずっと、」

それ以上は言葉にならなかった。

あたたくくて、幸せで。そんな自分が怖いぐらいで。

髑髏は息が詰まって何も話せなくなる。無言でぼろぼろと泣きながら、骸を見上げることしかできない。

けれど骸は、わかっていますよ、と囁いて、髑髏の頭を撫でつつける。

現実世界では触れ合ったことがないけれど、でも髑髏は、骸の手の感触を、絶対に覚えていようと思った。

「  
」

夢の中で、あの人はいったい何を言おうとしたのだろう。

結局それだけは分からずじまいだったけれど、でも髑髏はもう怖くはなかった。

探さなくても、自分から手を伸ばさなくても、自分はずっと大切な人の傍にいられるのだ。

「むくろさま」

紅に誓う

いつか、その人のために命を投げ出す、  
最期の瞬間<sup>とき</sup>まで。

誓（後書き）

骸様が本当の体を取り戻しても、髑髏ちゃんを傍に置いてくれてたらしいな、という願いを込めて書きました。

骸様の愛情表現は、とことん歪んでればいいと思います。

原作とは大分キャラが違います、骸様に限らず、黒曜組は皆ちよつとズレてると思います。

なんだかなだでお互いを大切に感じてくれていればいいな。

っていうか私、骸様骸様って…骸様のことばつか言いすぎですね。

（しようがないじゃないか大好きなんだ！）

でも私、綱吉くんも大好きです。あ、聞いていないですかそうですか。

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5180c/>

---

紅に誓う

2009年3月24日10時37分発行